

# 生物

## 出題傾向とアドバイス

公募推薦入学試験[A・B日程] / 特待生入学試験 / 一般入学試験[前期A・B日程]

### 出題傾向

#### ○ 公募推薦入学試験[A・B日程]

A・B日程ともに大問数は4題、全問マーク式の出題形式で、試験時間は60分である。A・B日程ともに各大問に10個のマーク箇所が含まれる。出題内容は、A日程は、第1問（生物の特徴）、第2問（遺伝子）、第3問（生物の体内環境の維持）、第4問（バイオーム）である。B日程は、第1問（生物の特徴）、第2問（遺伝情報とタンパク質の合成）、第3問（生体の体内環境）、第4問（生態系における物質循環）である。生物基礎の範囲全体から幅広く出題されており、難易度は基礎～標準レベルである。A・B日程ともに、文章の正誤を問う設問や計算の必要な設問が出題されている。

#### ○ 特待生入学試験

大問数は5題で、試験時間は60分である。全問マーク式の出題である。各大問に8個程度のマーク箇所が含まれる。出題内容は、第1問（生体膜）、第2問（遺伝子の発現調節）、第3問（生殖と発生）、第4問（刺激の受容と反応）、第5問（生物の系統）である。生物基礎・生物の範囲から出題されている。教科書の範囲からの出題であり、難易度は標準レベルである。なお、第1問は生体膜に関する大問だが、免疫やホルモンなどに関連する設問も出題されている。第3問は生殖と発生に関する大問だが、おもに染色体と遺伝子座に関する内容が出題されている。

#### ○ 一般入学試験[前期A・B日程]

A・B日程ともに大問数は5題で、試験時間は60分である。全問マーク式の出題である。各大問に8個のマーク箇所が含まれる。出題内容は、A日程は、第1問（代謝、特に呼吸）、第2問（バイオテクノロジー）、第3問（カエルの発生）、第4問（植物の環境応答）、第5問（地質時代）である。B日程は、第1問（タンパク質）、第2問（DNAの塩基配列、突然変異など）、第3問（眼の器官形成）、第4問（神経の興奮と伝導）、第5問（生物群集と生態系）である。生物基礎・生物の範囲から出題されており、難易度は基礎～標準レベルである。A・B日程のどちらも計算問題が1問出題されている。

### アドバイス

#### ① 教科書の内容を細かく正確に理解しておこう

全体的に難易度は高くないが、幅広い分野の正確な知識を求められるので、教科書を読み込み、どこから出題されても解けるように苦手分野をなくしておきたい。図表や実験に基づくような計算問題は出題されておらず、正誤問題や教科書レベルの問題が多く出題されている。正誤問題は「どれか1つが正しい」ではなく、提示された文章の「両方とも正しい」、「両方とも間違い」など選択肢の多さを考慮すると、記述内容について正確な理解が必要である。しかし、設問はいずれも基礎～標準レベルのため、問題集などに取り組み、基礎固めておくといよい。教科書や問題集で基本的な知識をおさえた後、一つのトピックを深く掘り下げた問題にも対応できるように、分野間の関連性を意識して知識を整理するとよいだろう。過去問題にも取り組み、実際の試験でどのような切り口で設問が出題されているのか、出題形式に慣れておくといよい。

#### ② 教科書の太字部分に加え、記載内容をしっかり理解しておこう

教科書を読む際に、太字の語句や名称のみに注意が向くかもしれないが、設問の穴埋め問題は、教科書の文章の説明そのままが多かった。そのため、難易度そのものは基礎から標準レベルであるが、語句や名称の暗記だけでなく、それらの意味する内容や現象をしっかり理解し説明できないと高得点は難しいだろう。また、一般入試前期では計算問題が出題されているが、毎年特定の分野だけから出題される訳ではないので、どの試験においても問題集で各分野の計算問題に慣れておくほうがよい。また、試験時間のペース配分も大切であるので、準備をしておきたい。各分野の内容を理解するとともに、本番を見据えて過去問題に取り組み、ペース配分を身につけておくと同時に、マーク式なので、マークミスのようなケアレスミスをなくしていくように慣れておこう。